論評の視点４

それぞれの絵画表現の〈初発の動機〉から：なぜ表現するか？何を表現するか？

小澤基弘
Motohiro, KOZAWA
埼玉大学 教授

■プロフィール
1959年愛知県生。筑波大学大学院（博）芸術学専攻中退　博士（芸術学）
1992年埼玉大学教育学部講師
1998年　文化庁芸術家在外研修員（1年派遣、パリ国立高等美術学校教授研修員）
2008年　西オレゴン大学芸術学部客員教授兼客員芸術家
現在：埼玉大学教育学部教授　東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科教授　東京大学大学院教育学研究科客員教授
専門：絵画・絵画論

■専門領域・研究課題
絵画、絵画論、絵画教育論。現在はドローイングを制作の中心としている。大学教育では、ドローイング及びその省察を中心とした授業を展開し、その教育効果を認知的視点から分析する学際研究を進めている。

■主な著書（単）：
『絵画の制作－自己発見の旅』（花伝社、単著、2001年）、『実現への制作学－作品と理論の相関から』（三元社、2001年）、『絵画の思索 - 絵画はいつ完成するか』（花伝社、2006年）、『絵画の創造力：ドローイング活用法』（花伝社、2012年）

■主な編著：
『絵画の教科書』（日本文教出版、2001年）、『絵画の制作学』（日本文教出版、2007年）、『創造のたね：ドローイングのはなし』（日本文教出版、2011年）

■主な展覧会
安井賞展（第34回、第40回）、現代日本美術展（第18回、第23～29回）、風の芸術展（第4回、第5回佳作賞）、他に前田寛治大賞展、ドマーニ明日2003、NICAF2003Tokyo他に出品。紀伊國屋画廊、村松画廊、Oギャラリー、Galerie Yve Fay（Paris）、西オレゴン大学、上海彫刻公園美術館 他で個展、グループ展多数。

■社会的活動
『文部科学省検定済教科書　中学校美術』(日本文教出版)著作者
『文部科学省検定済教科書　高等学校芸術科美術１』（日本文教出版）著作者
日本教育大学協会全国美術部門　副代表（2010～2011）
同　監事（2012～）
埼玉県立近代美術館利用審査会委員

■e-mail mkozawa@mail.saitama-u.ac.jp

１．論評の前提として：「初発の動機」から

前提として、私は「絵画教育」という限定した立ち位置から論評をするつもりはありません。その点では、そもそもこの地区会の「絵画教育を再認識する」というテーマから外れているかもしれません。「絵画」それ自体を教えなければならないとすれば、それが内包する諸々の要素や概念、あるいはそれが辿ってきた歴史的経緯等を、一つ一つ系統的・構築的に指導していく必要があります。確かにそうした絵画に対する知的理解のための教育も大学教育には必要ではあります。しかし、それ以前のもっと本質的な問題、つまり「私はなぜ美術を将来の糧として選んだのか？」「なぜ私は表現しようとしているのか？」「私は何を表現したいのか？」等、つまり自分にとっての表現の動機と意味、そのためにどのような手立てが相応しいのかについて、学生が自ら自覚しそれを志向し実現できるよう仕向けるための教育のあり方が、大学における美術教育上の最優先の課題なのだと考えます。それは「絵画」という限定された枠組みの中で考えるべき問題ではありません。

教員養成系大学で美術（特に実技）を教える人間は、かつておそらく高校生（あるいはもっと早い時期あるいは遅い時期か？）の頃に、美術の道に進むことを決意しているはずです。将来の道として美術を選択することは、おそらく他の進路を選ぶ以上に、大きな動機とそれに相応する覚悟が伴っていたはずです。それを私は、美術を志す「初発の動機」と呼んでいますが、各教員のそうした動機はそれぞれまちまちでしょう。私が思うに、そうした各教員の「初発の動機」が、今現在に至るまで脈々と続き、それがその教員の現在の美術表現、美術観、そして美術教育観を決定づけていると言っても過言でないと思います。おそらく今回の３名の大学の絵画の先生方が提案される内容は、そのことを物語るものになるのではと思っています。まず私はその点に着眼してそれぞれのご提案を拝聴したいと思います。

２．私自身の初発の動機について

翻って私自身の初発の動機を考える時、私にとって美術とは見失った自分を取り戻すためにありました。高校時代、心身のバランスを欠いて自己喪失していた時期があり、その治療のために医師から絵日記をなかば強制的に描かされていたことが、私が美術の道に入る決定的な契機となりました。絵日記を辿ること、絵日記を描き続けることによって、自分の在り方、自分の考え、自分の感覚、自分の存在等、自らに関わる諸々を日々確かめることができました。その積み重ねと省察の結果、病的な自己喪失から回復したという経験を私はもっています。それが私の美術（「描くこと・表現すること」）に対する初発の動機であり、そのときに美術表現の力と可能性を

私は実感したわけで、その実感が現在に至るまで継続して、私の絵画表現や絵画観そして教育観を形作ってきました。

ですから、私にとって重要なことは、「絵画」云々ではなく、あくまで「自己表現とは？」という問題なのです。初めに絵画ありきではなく、自己省察のための絵日記があり、それが私の場合たまたま「絵画」という表現手段へとつながっていったというわけですから、絵画教員という立場にあるとはいえ私の大学での教育理念は、学生各自が「自分にとっての表現とは？」を自覚した上で、自らの表現を探り、深め、実現するための適切な助言をいかに行い得るか、がすべてであると考えています。その結果、学生が絵画表現を志向したいということになれば、そのための具体的手立て、つまり技法や考え方、知的理解等々を必要に応じて適時指導していくというスタンスです。

3．作品主義と過程主義

今回のこの地区会の「絵画教育再考」をテーマにした研究会は、絵画という限定された領域の教育を再考することによって、現在の大学における美術教育、翻っては学校現場における図工・美術教育の枠組みの在り方に対する再考のための、重要な契機になるだろうと考えます。絵画・彫刻・デザイン・工芸という従来の縦割りの実技の捉え方に対する様々な見解が、議論の中で往来することになろうかと思うからです。前述のように、私はそもそも絵画それ自体に対する興味からこの世界に入っていないので、基本的に絵画教育を限定的に捉える事には疑問をもつ立場です。これらの縦割り分野は、要するに全て「表現」であり、更に広く言えば「創造」です。ですから、美術教育を根源的に考える場合、やはり「絵画とは？」から入るのではなく、「表現とは？」そして「創造とは？」という間口から入るべきと考えます。そしてそれを考える端緒は、各人の表現に対するそもそものスタンス、つまり「初発の動機」のなかにあると思います。学生各自のその動機を炙り出し、彼らがそれを自覚化できてこそ、それぞれの美術表現（絵画表現を含む）が本質的にスタートするのだと私は考えており、何とかしてそこをつまびらかにすることこそが、大学における美術教育（絵画教育を含む）の為すべきことだと思うのです。

おそらくこの考え方は、絵画あるいは美術表現を、「作品主義」として捉えるかあるいは「過程主義」として捉えるかという問題と直結します。前提として「絵画教育」を標榜する場合、そこにはおそらく自立した作品形態としての「絵画」という認識が根底にあると考えます。この認識は、例えば技法の問題、様式や歴史的経緯の問題等、絵画に関わる知的理解の問題とも深く関わります。他方、過程主義とはプロセスのなかでの自己発見や自己実現の方にウエートを置いた考え方であり、要するに「自分とは何か」という極めて実存的・哲学的問題に深く関わるアプローチです。ですからこの観点から美術表現をとらえた場合、絵画や彫刻等の表現の分野別けそれ自体意味をもちません。

私は一貫してこの後者の立場（「過程主義」）で自分の表現や絵画観を構築してきており、既に20数年前にそれを「ジャコメッティ的アプローチ」と命名して、美術教育におけるこのアプローチの重要性を表明してきました。「ジャコメッテイ的」とは、画家であり彫刻家でもあったアルベルト・ジャコメッティ（彼のマルチメディア的表現それ自体が分野別けのナンセンスを物語っています）の制作が、常に形成と破壊の繰り返しで完成に至り得なかったこと、彼はそのプロセスのなかで常に「今日は昨日よりもよりよくものが見える」ことに重きを置き、現実のリアリティを毎日更新していく術としての制作という発想の下に表現を続けていたという事実に、深く私が感銘を受けていたことから、そう命名していました。こうした二つの大きなスタンスについてもおそらく議論の遡上に上るものと考えています。

4．美術教育の豊かさを目指して

雑然と書いてきてしまいましたが、以上が今回のご提案を論評する際の私の視点です。繰り返しになりますが、大学で絵画を教える教員には、それぞれこの世界に入ろうとした際の初発の動機があります。それが各教員の教育観の核になっているのではないか、と私は想像します。それは他の絵画教員には共有できる部分とそうでない部分があるだろうことも容易に想像できます。何が正しいかということではなく、一番大事なことは、自身のそうした実感を伴う表現動機の核心に、その教育が足場を置いているかどうかということだろうと思うのです。まずそれが為されていてはじめて、それ以外の絵画の幅の教育が加えられ位置づくのではないでしょうか。普遍的な教育内容を講ずるのではなく、各教員がその大学で絵画を指導するその「いま・ここ」の尊さこそが、美術教育（絵画教育を含む）の豊かさを生むのだと考えます。

小澤基弘『My Landscapes（drawings from2004 to2006）』
（「ドローイングをめぐって」展、茨城県つくば美術館、2006年）